

茨城大学学報

第347号

令和元年10月～令和元年11月



台風 19 号災害ボランティア活動(日越大学生参加)

INDEX

- ◆ 日立キャンパスの新バス停 学生向け設計コンペを実施
- ◆ 茨城大学 創立 70 周年記念職員OB・OGと現職職員総勢約 90 名が集う「水交会」を開催「主体性評価」テーマに高大接続シンポジウム
- ◆ 台風 19 号災害の復旧に向けた取り組みをスピーディーに始動
- ◆ 那珂市と包括連携協定を調印、自治体初のリカレント教育カスタムプログラムも開講
- ◆ 茨城の魅力を探求・発信する高校生のコンテストを初企画
- ◆ 創立 70 周年記念講演会を東京都内で開催
- ◆ 2019 三大学交流セミナー開催 茨城の食資源を活用した健康づくり～食がつなぐ農と脳～
- ◆ クラウドファンディングで修繕「菅文庫」資料をお披露目
- ◆ 農業をめぐる「技術革新」と茨城の地域活性化について語る—茨城大学・茨城県・茨城産業会議連携講演会
- ◆ プロバスケ・茨城ロボッツ 茨城大学創立 70 周年記念試合開催
- ◆ 本学五浦美術文化研究所へ木村武山らの作品が寄贈される
- ◆ 次期学長候補者に太田寛行理事を選出「多様性を活かした大学の実現めざす」

茨城大学広報室

TEL 029-228-8008

FAX 029-228-8019

◆ 日立キャンパスの新バス停 学生向け設計コンペを実施

日立キャンパスの正門周辺景観整備にあたり、バス待合所の設計デザインの学生向けコンペティションが行われ、10月1日に公開審査が実施されました。コンペには工学部の学部生・大学院生による8つのチームが参加し、オーノ JAPAN 代表の構造家・大野博史氏らが審査委員を務めました。学生たちは模型やCGを使いながら自らの設計意図を説明し、いずれも工学部の成り立ちや地域の状況を踏まえたレベルの高い提案で、審査員からの安全性や素材、コストなどについて厳しい質問にも真摯に対応していました。審査の結果、建築敷地の形をトレースするように象った大きな屋根が特徴的な、理工学研究科博士前期課程2年の中根央喜さんの作品「Connecting roof」が最優秀賞を獲得しました。今後予算内での実現に向けて調整を進め、年度内の完成をめざします。また、12月7日に開催する日立キャンパス正門周辺環境整備の竣工記念式典において表彰式を行う予定です。



◆ 茨城大学 創立70周年記念 職員OB・OGと現職職員総勢約90名が集う「水交会」を開催

10月4日に、第13回水交会総会を開催しました。

「水交会」は、本学の職員OB・OGと現職職員が交流する場で、2年に1度、総会を開催しています。今回の総会には、小村久米夫会長（元本学事務局長）、鈴木優子副会長（元本学学務部長）、中村壽之幹事（元本学教育学部事務長）らを含めて約30名のOB・OGが出席し、大学からは、三村信男学長をはじめ、若手職員も含めた約60名の現職職員が参加しました。

総会では、小村会長より、「茨城大学が創立70周年を迎えたことは大変喜ばしいことである。国立大学にとっては依然として厳しい時代だが、現職職員との懇親を通じて、先人の知恵を伝えてもらいたい。人生100年時代、健康で長生きしてほしい」との挨拶がありました。続いて、三村学長からは、「70年を振り返り、本学が残してきた足跡を改めて確認できたことは、大きな意義があった。これも、職員OB・OGの皆様の貢献があつてのことである。あと5年で、源流である拡充師範学校の創設から150年という大きな節目を迎えるが、それに向けてさらに本学を発展させていきたい」と挨拶し、今後も引き続き職員との交流が図られることに期待を寄せました。

その後、岩切健一郎理事・事務局長から、本学の近況について紹介した後、本年5月25日に開催した「茨城大学創立70周年記念式典」について、当日の様子を映像にしたダイジェストムービーを放映して紹介を行いました。

総会後は、学内にある茨苑会館のレストランで懇親会が開催され、鈴木副会長から、開会の挨拶をいただいた後に乾杯を行い、今回から新たに会員となった小新敏充情報システム研究機構事務部長（前茨城大学総務部長）など、多くのOB・OGと現職職員が参加し、久しぶりに会う旧知の職員らとの懐かしい思い出話に花を咲かせて、盛会のうちに幕を閉じました。



左から都賀善信水交会前会長、三村信男学長、小村久米夫水交会会長、鈴木優子水交会副会長、山本典子総務課長



本学の近況報告をする
岩切健一郎事務局長・水交会副会長



左から岩切健一郎事務局長・水交会副会長、
都賀善信水交会前会長、佐藤秀雄総務部長



集合写真（水交会会員・現職職員）



左から中村壽之水交会幹事、三村信男学長



左から、鈴木優子水交会副会長、
小新敏充情報・システム研究機構事務部長（前本学総務部長）

◆ 台風 19 号災害の復旧に向けた取り組みをスピーディーに始動

本学では、関東甲信越・東北地方に甚大な被害をもたらした台風 19 号災害にあたり、被災した学生・教職員・受験生の支援や、学生等のボランティア派遣、災害調査等の対応方針を決定し、「令和元年台風 19 号災害支援チーム」を設置しました。地域の復旧・復興へ向け、既に多様な活動を展開しています。

台風 19 号は 10 月 12 日から 13 日にかけて日本各地で猛威をふるい、本学のキャンパス周辺も浸水などの大きな被害を受けました。本学では 10 月 15 日には、学内での対応と社会に向けた取り組みをまとめた緊急対応の方針を決定し、その方針のもとで、三村信男学長を座長とする令和元年台風 19 号災害支援チームを設置しました。

翌 16 日には、災害復旧ボランティアを希望する学生向けの説明会を開いたところ、想定を超える約 250 人の学生が出席し、ボランティア参加にあたっての注意点や支援内容について説明しました。その後、被災地へのバスの派遣などを通じて、継続的に学生の活動の支援にあたっています。あわせて本学のホームページでは台風 19 号関連のメニューも新設し、支援の内容や活動の記録などの情報をまとめて提供し始めました。

また、多様な分野の教員による災害調査団も結成することとなり、今後、「被災過程解明」「農業・生態系」「情報伝達・避難行動」「住民ケア支援」「文化財レスキュー」といったグループ編成による計画的な調査のほか、学内からの公募研究も受け付け、研究費などの支援を行います。調査団では、災害発生から 1 年以内を目安に最終報告書をまとめる予定です。

三村学長は、「今こそ『地域の知の拠点』としての役割を發揮し、学生・教職員には、地域の方々とともに復旧、復興の取り組みに協力してほしい」と呼びかけました。



大学が用意したバスで被災地へ向かうボランティアの学生たち



常陸太田市でのボランティア活動の様子

◆ 那珂市と包括連携協定を調印、 自治体初のリカレント教育カスタムプログラムも開講

本学と那珂市は、10月16日、「国立大学法人茨城大学と那珂市との相互連携・協力に関する包括協定書」による協定を締結し、学術研究の成果を活かした地域課題の解決や人材育成を推進することになりました。また、この協定により、本学の「那珂市リカレント教育プログラム」が新たに開講しました。

本学と那珂市との間では、これまで学校教育、生涯学習、防災などの分野や、学生のインターンシップ受入などの面でさまざまな協力事業を行ってきましたが、今後さらに幅広い連携協力を体系的に進めていくことを目指し、今回の包括協定の締結に至りました。

10月16日に那珂市役所で行われた協定書の調印式で、本学の三村信男学長は、「市長には就任直後から大学との連携に対する積極的なお考えを表明いただいていたが、その後短期間で調印締結に至ったことについて、市長の強いリーダーシップに感謝したい。この機会にさらに連携を深め、相談を密にしながら、地域社会への貢献につながる取り組みにつなげたい」と挨拶しました。また、那珂市の先崎光市長は、「那珂市をもっと発展させるには人づくりが必要だと思っている。そのためには茨城大学の力を何としてもお借りしたいと考えていた。さまざまな連携テーマがあるが、茨城大学の知の財産を地域のみならず、前進していくことが今求められている。今日はその輝かしい一歩となった」と語りました。

この協定に基づく第一弾の事業として、本学において、那珂市職員向けのリカレント教育プログラムを2019年度後期より開講しました。本学のリカレント教育プログラムでは、企業や自治体ごとにカスタマイズしたカリキュラムを提供するコースを開講していますが、自治体向けには初めての開講となります。

今年度後期は、“第一期生”として30歳代の2名の職員が受講を開始しました。受講する職員は、「学生のみなさんと一緒に、積極的に自分から学んでいくという姿勢で授業に臨むことで、自分の成長はもちろん、ゆくゆくは地域に学んだことを還元する機会にできればと考えている」などと意気込みを述べました。



◆ 茨城の魅力を探求・発信する高校生のコンテストを初企画

本学人文社会科学部がこのほど、高校生が茨城県内の地域の魅力を探求して製作した動画やスライドショーを募集する「茨城の魅力を探求し発信する高校生コンテスト」を初めて企画しました。茨城県議会や茨城県教育委員会の後援もあり、2019年10月現在で約500人・75チームからエントリーがありましたが、本学では引き続き県内の高校に参加を呼びかけています。

10月18日に茨城県庁で行った記者会見で、人文社会科学部の内田聡学部長は、「高校生にしか見えない地域の魅力の発信を、大学がサポートするという新しい取り組み。ふるさとを想う若者、茨城大好きな大人を育てたい」とコンテストの意義を説明しました。また、会見に同席した後援の茨城県議会・川津隆議長も、「台風19号の被害に多くの人たちが苦しんでいる中、高校生がふるさとを学び、想ってくれば、大きな力となると確信している。県民を元気づける今回の企画を、開かれた議会をめざす私たちとしてもしっかり支えたい」と語りました。

この会見には、コンテストの運営に参加し、高校生たちの訪問相談にも対応している学生メンバーも出席しました。4年生の猿田倫美さんは、「コンテンツのアイデア出しから携わっているが、高校生が楽しんでいることが印象的。そうして見つけた地域の魅力を発展させていくのが自分たちの役割と考えている」と想いを述べました。

作品の応募は12月10日まで受け付け、2月15日には本学水戸キャンパスで公開発表会を開催する予定です。



記者会見の様子

中央右が内田学部長、その右が馬渡剛教授。中央左は茨城県議会の川津隆議長

◆ 創立70周年記念講演会を東京都内で開催

本学は10月26日、創立70周年記念講演会を東京都内の学術総合センターで開催しました。

例年、同窓会会員や卒業生らが集まるホームカミングデーを学内の会場で開催していますが、今回は創立70周年を記念して東京都内の学術総合センター「一橋講堂」で開催しました。講演会には、外山彬本学同窓会連合会会長をはじめ、各学部の同窓会会長や三村信男学長のほか大学関係者等約200名が参加しました。司会は本学の卒業生でNHK水戸放送局の金田優香アナウンサーが務めました。

講演会では同窓会担当の鳥羽田英夫理事より、「今年のホームカミングデーは、本学の創立70周年を記念して、首都圏近郊の同窓会員にも集まっていただけよう東京で開催することとなった。初めての東京開催であり、本学の岡田誠教授による記念講演も企画しているので、大いにお楽しみいただき、今後も引き続き茨城大学へのご支援を賜りたい」との開会の挨拶がありました。続いて、三村信男学長からは「本学は今年で創立70周年を迎えた。この間、9万8千人の卒業生を社会に送り出しており、戦後の復興や経済的な発展などの激しい変化の中で、それを支える多くの優れた人材を社会に送り出してきたという認識を新たにしている。今後も本学が、我が国の持続的な発展のために貢献することを願って、教育改革や研究、社会貢献を一層進めていく」との挨拶がありました。さらに、外山彬同窓会連合会会長から、「茨城大学はこれまでも社会の発展に貢献し、社会に有為な人材を輩出してきた。さらに、近年においては、地域の知の拠点としての存在感を大きくアピールしており、今後も地域に開かれた特色ある大学として一層の成果を期待している。また、各同窓会からのご支援、ご協力に感謝するとともに、同窓会連合会として引き続き茨城大学の支援に努めてまいりたい」との挨拶があり、各同窓会と大学との連携が図られることに期待を寄せました。

その後、佐川泰弘副学長から、本年5月25日に開催した「茨城大学創立70周年記念式典」について、映像やスライドを使って各種事業のプレゼンテーションを行うとともに当日の様子を報告しました。また、記念講演として、理学部の岡田誠教授より『チバニアンと地質時代』と題し、岡田教授の研究分野である地質学やチバニアンの申請に関するエピソードなどについて、ユーモアを交えて約1時間の講演を行いました。参加者は興味深く聞き入り、講演後は会場から質問が出るなど、本講演に対する関心の高さがうかがえました。

講演会終了後は、同じく学術総合センター内の中会議室において懇親会が開催されました。尾崎久記理事・副学長より開会の挨拶があり、同窓会連合会の前会長である土田惣一氏の乾杯の発声により懇親会がスタートし、土田惣一文理・人文学部同窓会会長、外山彬教育学部同窓会会長、久保田益充理学部同窓会会長、杉田龍二多賀工業会（工学部同窓会）会長、福地省行農学部同窓会会長からそれぞれ挨拶があり、各同窓会の現状と今後の展望などが紹介されました。その後は、創立70周年記念式典の様子を紹介する映像や在

学生の歌のパフォーマンスが披露され、会場は大いに盛り上がりました。最後に、参加者全員で声高らかに校歌を斉唱し、太田寛行理事・副学長の閉会の挨拶をもって盛会のうちに幕を閉じました。



挨拶をする三村信男学長



挨拶をする鳥羽田英夫理事



挨拶をする外山彬同窓会連合会会長



司会を務める金田優香
NHK 水戸放送局キャスター



70周年記念事業を紹介する佐川泰弘副学長



基調講演を行う岡田誠教授



講演会に参加した同窓会会員や大学関係者が一堂に会した



懇親会で挨拶をする尾崎久記理事・副学長



乾杯の挨拶をする土田惣一同窓会連合会前会長



挨拶をする土田惣一文理・人文学部同窓会会長



挨拶をする外山彬教育学部同窓会会長



挨拶をする久保田益充理学部同窓会会長



挨拶をする杉田龍二多賀工業会（工学部同窓会）会長



挨拶をする福地省行農学部同窓会会長



懇親会での岡田誠教授と金田優香 NHK 水戸放送局キャスター



左から、佐川泰弘副学長、太田寛行理事・副学長、鳥羽田英夫理事



懇親会に出席した同窓会員と大学関係者で記念写真

◆ 2019三大学交流セミナー開催
茨城の食資源を活用した健康づくり～食がつなぐ農と脳～

11月1日、本学阿見キャンパス・フードイノベーション棟にて、本学農学部・東京医科大学茨城医療センター・茨城県立医療大学が主催の三大学交流セミナーが開催されました。この講演会は毎年実施しており、今回で12回目の開催。今年のテーマは、「茨城の食資源を活用した健康づくり～食がつなぐ農と脳～」です。

第一部の話題提供では、茨城県営業戦略部販売流通課長の郡司彰氏が「茨城をたべよう運動の取組について」をテーマに登壇しました。「茨城県は農業産出額全国第3位の農業大県に成長したが、農林水産物の知名度やブランドイメージは高いとは言えず、加工品においても商品開発や販路の開拓が必要」と課題を述べました。

続いて、「茨城の米と水」というテーマで、県内の酒蔵から、(資)廣瀬商店の廣瀬慶之助氏、府中誉(株)の山内孝明氏、(資)浦里酒造店の浦里浩司氏の3名に登壇し、各社の酒の原料として、茨城産の米を使用していることについて説明しました。

第二部の特別講演では、筑波大学国際統合睡眠医科学研究機構長の柳沢正史教授が「睡眠覚醒の謎に挑む」というテーマで登壇し、睡眠覚醒は、いまだにその機能と制御メカニズムには謎が多いことを説明しました。また、日中の過度の眠気や、自分では制御できない眠気が繰り返し起こることが特徴の睡眠障害ナルコレプシーの根本的な要因が、「オレキシン」という物質の欠乏にあることを解説しました。

第三部では、主催の三大学それぞれの代表者の講演です。

最初に登壇した本学農学部の豊田淳教授は、「茨城県地場産品を世界に売り出すための基礎研究～フクレミカンの例～」というテーマで講演し、うつ病モデルマウスを用いて実験をおこない、筑波山麓で栽培されるフクレミカンの健康機能性について発見をしたことを紹介しました。

続いて登壇した東京医科大茨城医療センターの大城幸雄氏は、「E型肝炎の現状」というテーマで講演。E型肝炎は、E型肝炎ウイルス(HEV)感染によって発症するウイルス性肝炎の一つであり、肝炎としては唯一の人獣共通感染症であることを解説しました。

最後に登壇した茨城県立医療大学の岸本浩氏は、「『食』がリハビリを支え健康寿命を伸ばす」というテーマで講演し、リハビリテーションと栄養管理を同時に考えたケア・支援が、患者のQOL(クオリティ・オブ・ライフ)向上を目指すものとして近年リハビリテーション医療のなかに普及してきていることを説明しました。

1時間半ちかくに及んだ講演会は、ホールがほぼ満席になるほど多数の聴講者が集まり、盛況のうちに終わりました。また、講演会の最後には令和元年度文化功労者に選出された柳沢氏に対し、三村信男学長から花束が贈呈されました。



柳沢氏に花束を手渡す三村学長

◆ クラウドファンディングで修繕「菅文庫」資料をお披露目

本学図書館では、旧水戸藩出身の史学者・菅政友の 10000 冊に及ぶ貴重書コレクション「菅文庫」を所蔵していますが、これらの史料について、カビや虫食いなどによる損傷が激しかったことから、今年春に修繕費用の支援をクラウドファンディングで呼びかけたところ、多くの寄附が寄せられ、修繕作業が進められてきました。

11月1日～17日、修繕した全資料のお披露目する特別展を図書館展示室で開催しました。きれいになった資料はもちろん、修繕前の写真や修繕道具もあわせて展示をしました。さらに最終日の17日には、支援者へのお礼を兼ねたギャラリートーク&図書館バックヤードツアーも実施し、参加者は人文社会科学部の高橋修教授のトークや資料のクリーニング体験を通じて理解を深めていました。



◆ 農業をめぐる「技術革新」と茨城の地域活性化について語る— 茨城大学・茨城県・茨城産業会議連携講演会

茨城大学・茨城県・茨城産業会議の主催による「農業をめぐる『技術革新』と茨城の地域活性化」と題した連携講演会が、11月5日、ホテルテラスザガーデン水戸にて開催されました。この講演会は、農業をめぐる技術革新の現状およびそれらを地域の活性化にどのように活かせるか、ということについて考えることを趣旨としたものです。

第一部の基調講演では、本学農学部の小松崎将一教授、岡山毅教授の2名が登壇しました。小松崎教授は「地域を元気にする農業を目指して」というテーマで講演し、食糧増産や、環境変動によって農地面積が不足している現状について説明した上で、家庭や工場から排出される食品廃棄物を有機肥料へと変換させた商品「HI コンポストS」を紹介しました。続いて、岡山毅教授が「技術革新によるスマートアグリの実現」というテーマで登壇し、前半は、スマート農業とはどういうものかについて、(1) 超省力・大規模生産を実現 (2) 作物の能力を最大限に発揮 (3) きつい作業、危険な作業から解放 (4) 誰もが取り組みやすい農業を実現 (5) 消費者、実需者に安心と信頼を提供、という5つのポイントに沿って解説しました。

第二部は、小松崎教授・岡山教授に加えて、株式会社エムスクエア・ラボ代表取締役の加藤百合子氏、株式会社ドロップ代表取締役の三浦綾佳氏、有機農家の山田晃太郎氏の3名のパネリストを交えてディスカッションを行いました。

パネルディスカッションは、参加者からの質問にパネリストが答える形式で進行し、「新規就農に際して大変だったことは？」という質問に対して、新規就農を経験した山田氏は「畑の近くにある、条件のいい家を探すことが大変」と述べ、続いて三浦氏は、「農作物に対して『いつもと違うな』と感じても、どのような対応をとればいいのか判断がつかない」と苦労を語りました。

また、「近年日本では、大雨や台風など異常気象が続いている。スマート農業はこういった不測の事態どこまで対応が可能か」という質問に対しては加藤氏が回答し、「日々技術も進歩しているため、困難に直面した場合でも、それぞれの分野の研究者が知恵を出し合うことによって乗り切れる」と考えを述べました。

「農家の中には最新技術を取り入れること抵抗がある人もいる。」との意見に対しては、岡山教授が「ICTを使いこなすレベルには個人差があるため、行政等に協力いただき、全体のレベルのボトムアップを図るために工夫が必要」と述べました。

ディスカッションの最後のまとめとして、小松崎教授は、「農業は、関わる人々が幸せになるような産業を目指さなければならない。そのため、最新技術を利用して実現することができれば」と語りました。



◆ プロバスケ・茨城ロボッツ 茨城大学創立 70 周年記念試合開催

11月9日・10日、男子プロバスケットボールBリーグ（B2）の茨城ロボッツと広島ドラゴンフライズの試合が、「茨城大学創立 70 周年記念試合」としてアダストリアみとアリーナにて開催されました。

茨城ロボッツと本学は、2018年に連携協定を締結し、その後、連携記念試合や本学教員と協力した戦略的地域連携プロジェクトなどの取り組みを行ってきました。今回は、本学が今年創立 70 周年を迎えたことを記念し、さまざまな特別企画を展開し、本試合では、両日ともに本学の PR ブースや写真撮影スポットが設置され、多くの観戦者が立ち寄りました。

試合会場には、特設ミニステージが設置され、本学の吹奏楽団、大道芸サークルスウェット組合、混声合唱団が、華やかなパフォーマンスにより試合前の会場を盛り上げました。また、9日の試合では、ハーフタイムに本学のチアリーディングサークル「Cherry's」も登場しました。

10日のオープニングでは、本学の三村信男学長がアリーナの中央で開会の挨拶を務めました。この日のハーフタイムでは観戦者が参加する借り人・借り物競争も行われ、三村学長が「借り人」の対象となるなど、会場が楽しい雰囲気になりました。

試合結果については、茨城ロボッツが両日とも惜しくも 2 点差で敗れました。

なお、今回の試合会場において、茨城ロボッツとの連携事業を担当している「茨城大学戦略的地域連携プロジェクト iBIRD」が、試合会場パフォーマンスを披露した学生など 43 人を対象にアンケート調査を行いました。このうち、今回の取り組みを通じて、本学のディプロマ・ポリシー（DP）となっている 5 つの茨城大学型基盤学力が身に付いたかを尋ねる質問では、90%を超える学生が「地域活性化志向」が高まったと回答しました。今回の経験が、学生たちの地域貢献への関心の高まりに繋がったことがうかがえました。



チアリーディングサークル Cherry's によるパフォーマンス

◆ 本学五浦美術文化研究所へ木村武山らの作品が寄贈される

10月1日、本学の五浦美術文化研究所へ掛け軸の作品4点が寄贈されました。岡倉天心と共に五浦で制作活動に励んだ木村武山による仏画と花鳥画のほか、長崎の平和祈念像で知られる彫刻家の北村西望の書、ノーベル物理学賞受賞者の湯川秀樹博士の書といったいずれも貴重な作品です。故人・寺門康三氏が収蔵していたものを、ご家族を通じて寄贈いただきました。

今回の寄贈を受け、11月21日に三村信男学長から寺門氏のご家族へ感謝状の贈呈を行いました。その後、五浦美術文化研究所長を務める藤原貞朗人文社会科学部教授から作品の紹介がありました。作品の寄贈を受けた五浦美術文化研究所では、天心遺跡を管理するとともに、その業績をしのび日本の近代美術や内外の文化・歴史研究を行っています。今回寄贈された作品は、当研究所に収蔵され、本学の研究および教育に役立てられます。

<寄贈された作品>

■「聖観音」作者：木村武山

・武山は晩年（昭和初期）、仏画をよく描いた。黒地に金彩で描いた人気のある作品で、見る者を瞑想へとといざなう。五浦の海に面した六角堂の床の間に飾り、静かに眺める機会を設けてみたいと思わせる。表装も仏画の規則に従い、軸には象牙ではなく、殺生のないようにと銅が用いられている。箱書は子息の武夫による。

■「あやめ（菖蒲）」作者：木村武山

・武山は花鳥画も得意とし、本学は色鮮やかに豪華に描かれた屏風《小春》をすでに所蔵しているが、この《あやめ》は対照的に渋い作品。水墨の茎と葉に、白い花が一輪描かれ、蜻蛉が止まっており、生命のはかなさを感じさせる。箱書は武山本人による。

■「洗心長寿」作者：北村西望

・長崎の《平和祈念像》や狛犬でよく知られる彫刻家・北村西望による書。《洗心長寿》の揮毫のとおり、西望は103歳の長寿をまっとうした。署名から、本作が百歳を越えての書であることが分かる。また、力強く構築的な文字は、いかにも彫刻家らしい。箱書は西望本人による。

■「息迹」作者：湯川秀樹

・「息迹（そくせき）」とは、足跡を止め、静かに立ち止まること。第一線で活躍してきた湯川博士の晩年の心境か、あるいは、仕事に邁進していた時の冷静な心持ちなのか。署名の「玄圃」は博士の筆名。箱書は奥様による。



今回寄贈された掛け軸4点、左から「聖観音」、「あやめ」、「洗心長寿」、「息迹」

◆ 次期学長候補者に太田寛行理事を選出
「多様性を活かした大学の実現めざす」

本学学長選考会議はこのたび、三村信男現学長の任期満了に伴う次の学長候補者として、太田寛行理事・副学長（教育統括）を選出しました。11月26日の記者会見では、太田理事が抱負を語りました。

会見の冒頭で太田理事は、「学生が活気にあふれ、教職員がやる気に満ち、地域が元気になる、多様性を活かした大学の実現を目指す」と述べた上で、①教育システム改革、②研究マネジメントの改善、③地域連携とグローバル化の強化、④教職員の処遇改善と財政改革、⑤運営強化、⑥学内コミュニケーションのさらなる向上、⑦ダイバーシティを活かした大学づくりの7つの項目に重点をおいて大学運営を実行することを宣言しました。

本学では今後、太田理事を学長候補者として文部科学大臣に申し出をし、文部科学大臣の任命を受けて学長就任となる予定です。次期学長の任期は、2020年4月1日～2024年3月31日です。



学長予定者に選ばれ記者会見に臨む太田理事